

[研究ノート]

嫉妬と受難

—映画『蛇娘と白髪魔』をめぐる比較的一考察—

公立千歳科学技術大学 理工学部 小川正浩

1

ひとつの引用から始めてみることにしよう。

戦後日本の漫画と小説とを比較してみて、それぞれに才能と力量が対応する作家の一覧を作ることはそう難しいことではない。だが漫画が三島由紀夫をもちえなかったように、小説にもどうしても到達できなかった漫画的才能というものがある。それが椋図かずおだ。逆にいえば、椋図こそは、日本漫画があればこそ輩出した稀有の作家であるということができる^[1]。

1970年代に小・中学生であったわたしにとって椋図かずおといえば恐怖の代名詞ともいえる漫画家であった。当時は『少年サンデー』で「漂流教室」を連載していたはずだが、むしろわたしが親しんだ椋図漫画は、60年代に描かれた一連の蛇ものや「おろち」などの恐怖漫画の単行本であった。「一般に日本漫画史における椋図の功績は、少女漫画の世界に恐怖を導入したことだとされている^[2]」。しかしわたしはこれに加えて、男性作家である椋図が、当時としては珍しく、母娘の憎悪愛の関係について積極的にペンを走らせていたことを指摘しておきたい。

さて、ここで1本の映画を取り上げたい。大映が1968年に公開した『蛇娘と白髪魔』^[3]である。映画を観ると、そのクレジット・タイトルに「原作椋図かずお」とあるように、『蛇娘と白髪魔』は椋図の「蛇」シリーズと「赤んぼう少女」、そして「紅グモ」を下敷にしている作品であった。

映画『蛇娘と白髪魔』は椋図の漫画をもとに新しい作品を創造するという、いわゆるアダプテーションものであるが、興味深いことに、椋図はさらにその映画をコミカライズしている。椋図が漫画化の際に依拠したのは映画のシナリオである^[4]。もっとも、それが純粋にシナリオだけに依るものなのか、それとも映像も観て何らかの参考にしたのかは判然としないが^[5]、映画はほぼ「赤んぼう少女^[6]」を土台にしている。それは、主人公の小百合に対して嫉妬と悪意を抱く少女の名前が「タマリ」となっていることから窺われる。他に「蛇」シリーズ^[7]や「紅グモ^[8]」からいくつかの状況設定が加えられている。たとえば、「赤んぼう少女」には物語を構成する要素として蛇は全く関係しないが、映画のタマリは小学生の頃に毒蛇に噛まれ、以来自らを蛇だと思い込んでいるという設定である。とはいえ、『蛇娘と白髪魔』には映画独自の要素も含まれていて、漫画と違うところも当然存在している。さら

に楳図が『蛇娘と白髪魔』を漫画化する際に映画からのシーンの取捨選択を行っているという事実も見逃せない。私の知る限り、映画『蛇娘と白髪魔』とその漫画版について論じたものはこれまでないように思われる。実は楳図漫画を原作とした映画化は『漂流教室』(1987)や『洗礼』(1996)など『蛇娘と白髪魔』以降も何本か製作されている。本稿では、漫画(原作)と映画(アダプテーション)というより広い文脈^[9]から楳図作品を考察していくその予備的作業として、『蛇娘と白髪魔』をひとつの事例として取り上げ、それらの表象媒体の違いにおける表現内容の差異についていくつか書き留めておきたい。

2

初めに原作となった漫画とその映画化について見ていくことにしよう。映画『蛇娘と白髪魔』は、前述したように、「赤んぼう少女」と「蛇」シリーズ、そして「紅グモ」から物語の中心となる部分を得ている。主人公の小百合は生まれてすぐ産院でタマミと取り違えられて、前者は施設で、後者は裕福な南条家で育つ。だが、タマミの顔には大きな赤痣があって、彼女は自分の顔の醜さに劣等感を抱き、屋根裏部屋で暮らしている。ある日父親は長年生き別れになっていた実の子小百合を「めぐみ園」から引き取り、自宅に連れ帰ってくる。タマミは小百合に嫉妬心を抱き、彼女を苛む。しかし、タマミは物語の最後で不慮の死を遂げ、はれて小百合は南条家の娘として幸せな日々を送ることになる。この大枠は「赤んぼう少女」と同じ構造である。この説話構造の中に個々の登場人物の設定が原作となった漫画から採られている。主人公の小百合(漫画では葉子)とタマミ、南条家の人間(父親と母親)、小百合の良き理解者である達也(漫画では高也)は、多少の違いはあるが、「赤んぼう少女」から借用されている。そしてタマミにはさらに「蛇娘」という役割が与えられている。これは一連の「蛇もの」作品から採ってきたもので、物語にある種の不気味さを漂わすことに貢献している。2, 3例を挙げてみよう。小百合がタマミの寝ていたベッドのシーツに蛇の鱗を発見する。小百合が入浴するタマミをこっそり覗き見るとその背中一面を鱗が覆っている。両生類・爬虫類図鑑の蛙の項を見て思わず舌なめずりしてしまうタマミの様子を背後から見ている小百合^[10]。このようにタマミには「蛇もの」の怪奇さが随所に顔を覗かせている。

『蛇娘と白髪魔』が上述の漫画を原作としている以上類似点があることは自然だが、その一方で両者には物語上の大きな違いもある。「赤んぼう少女」ではタマミが悪知恵を働かせて主体的に葉子を南条家から排除しようとするが、映画では南条家の使用人であるしげという中年女性が奸計をめぐらして小百合の追い出しを謀り、タマミはしげに唆されて小百合の排除に加担したということが映画の最後になって判明する。しげは映画の中盤から白髪魔(長い白髪に髑髏あるいは鬼面のような相貌をした妖婆で、この造型イメージは「紅グモ」のたか子にあるように思われる^[11])に変装して小百合を恐怖に陥れていく。ある夜、屋根裏部屋で寝ている小百合はベッドを這っている紅グモに気づき、それらを必死で払いのけていると背後から白髪魔に首を絞められて気絶してしまう。目を覚ますと窓から抜け出

し、タクシーを拾ってめぐみ園へ向かう（この時のタクシー運転手を榎岡かずおが演じている）。小百合は達也と共に園長からタマミは南条家の実の子ではないことを聞かされる。白髪魔は一部始終を窓越しに聞いている（実は白髪魔はタクシーの屋根につかまり乗りしていた）。真相が露呈するのを恐れた白髪魔は園長を殺害する。このあたりのシーケンスは「紅グモ」と「赤んぼう少女」が参照されている^[12]。

また、「赤んぼう少女」の有名な場面も映画では若干の違いがみられる。小百合を屋根裏部屋に追いやったタマミは、代わりに小百合の部屋で生活することになる。ある日、小百合が床の穴から下の部屋を覗くと、タマミが小百合の服を着て鏡台の前で髪を梳かしている光景が目に入る。タマミが顔の表皮を覆っているパックのような人工皮膚をとると素顔が露になり、顔半面を覆う赤痣をみて小百合は驚く。タマミは鏡越しに自分の顔をじっと見つめ心の中で諦念の声を発すると突然クローゼットに向かい小百合の服をベッドに投げつけ、泣き崩れてしまう。この場面は確かに「赤んぼう少女」を踏襲しているが、涙ぐむタマミの表情が憎悪に満ちたそれになり、すぐに葉子を呼びつけてサディスティックに苛め抜くという展開が映画にはない^[13]。映画のタマミはどちらかと言うと気色悪さをあまり感じさせないように見える（漫画では父も高也もタマミを見て、「このばけものめ」とか「うすきみわるい」と口にする^[14]）。その原因は映画でタマミを演じている高橋まゆみの容貌にあるのかもしれない。榎岡漫画に見られる「醜い心は顔貌に表れる」という設定^[15]は、漫画のタマミのようなある種フリーク的な形貌であってこそ説得力を持ち得るが、映画でタマミを演じる高橋まゆみの姿形だとどこか空々しく感じられてしまう。その証拠に映画の終盤においてもタマミが悪魔の心になり切れぬ一面を覗かせる。罨に嵌った小百合と達也は研究室の床に両手両足を縛られた状態で放り出され、命の危機にさらされる。タマミは小百合の顔に硫酸をかけようとするが達也に阻止され、バカなことは止めるよう説得される。この時白髪魔に扮したしげが登場し、タマミはしげに二人を殺すことを思いとどませようとする。だが、しげは自分たちが生き残るためには小百合と達也を殺すしかないと言い、タマミに石油を撒くように命令する。床一面に撒かれた石油に火をつけるとタマミとしげはその場をあとにする。燃え盛る屋敷を薄ら笑いを浮かべて眺めるしげだが、運よく火事場から逃げ出した小百合を目にしたしげは彼女を追って向かいの工事現場まで行き、建設途中の建物の上階から小百合を突き落とそうとする。タマミねーさん助けて、という小百合の叫び声にタマミはしげを止めようとするが運悪く落下死してしまう。このように映画のタマミは生まれながらの邪悪な心の持ち主というよりは顔の痣のために劣等感に苛まれ、凶漢に利用される哀れな女性であることが明らかにされる（霊安室でタマミの赤痣が薄くなった死に顔を見ると母親は「私の知っているタマミはこんなかわいい顔じゃなかった」と洩らす。達也は、たまみは最後に良心が蘇って清らかな顔になったと説く。一方、「赤んぼう少女」のタマミは死に際になって改心みせるが、その顔は硫酸がかかり一層醜くなっている^[16]）。こうして映画『蛇娘と白髪魔』は、心の美しさは顔の醜さを変えるとこの榎岡漫画ではあまり見られない終わり方をしていく。

それでは棋図はこの映画をどのように漫画化しているのだろうか。漫画は概ね映画の物語展開に沿って描かれているが、大きく違うところが二つある。ひとつは、オープニングの場面である。映画では、通いの家政婦が廊下を掃除中に研究室の方から何かの物音を聞きつけ、研究室の中に入っていき、すると奥の方に人影が見え声をかけると突然一匹の蛇が彼女に向って投げつけられる。蛇は彼女の首に巻き付き、締め付けていく。家政婦は必死に蛇を取り払おうとするが、あえなく絶命してしまう。突然雷鳴が響き渡り、雨が天窓を打つ。しげと女主人が両目を見開いて半開きの口元から血を流している家政婦を発見する。漫画ではこのオープニングの部分がすべて省かれて、父親が「めぐみ園」に小百合を迎えに来る場面から語り起されている(ただし、漫画でも背景に雨が降っている)。この冒頭の導入部の欠如によってこの屋敷に潜む不吉な気配とこれからの物語の展開に蛇が何らかの関係を持つという伏線が閉じられてしまうことは否めないだろう。だが、棋図にとってはそれが冗長に感じられたのかもしれない。その代わりに棋図は小百合の新しい生活に待ち受ける言い知れぬ恐怖の予感を簡潔に提示して見せる。それは次の場面である。父親は小百合を連れて屋敷に戻り、彼女に母親としげを紹介する。母親は小百合とタマミを間違えるが、気を取り直して食事までの間小百合に新しい洋服に着替えさせるようしげに指示を出す。棋図はここで映画にないコマを追加する。すなわち、小百合が入浴する場面である^[17]。湯船につかっている小百合はお湯の中に人間の目らしきものを発見すると同時に不気味な笑い声を聞いて一瞬取り乱してしまうが、すぐに気のせいだと忘れてしまう。この9コマの入浴シーンを加えることで映画とは違った形で言葉に表せない恐怖感を視覚的に提示している。もっとも、ここまでの場面は「赤んぼう少女」と同じ構成をとっているのだが(ついでに言えば、小百合と葉子、そして母親はほぼ同じ絵柄である)。このように、棋図は映画の場面を忠実に漫画で再現するのではなく、独自の視点から描き直していることが判明する(ここでは「赤んぼう少女」の冒頭部分を再利用している)。

もうひとつは、小百合の見る二つの夢の場面である(ちなみに、夢の演出効果として渦状の背景や目のオブジェなどが使われていてヒッチコックの『白い恐怖』や『めまい』を連想させる)。最初の場面は、タマミの存在を知った小百合が部屋で一緒に寝るときに登場する。タマミの横で寝込む小百合は夢の中で一人のかわいらしい女性に起こされる。彼女は実は小百合が「めぐみ園」を去るときに達也から贈られた人形の化身で、これから小百合の父の所まで行こうと誘う。小百合は人形の魔法と一緒に空を飛んで父のもとに向かうが、蛇娘と化したタマミ(長い黒髪、口が耳元まで裂け、牙のような前歯を出している。一方、漫画ではゴルゴーンのような怪物顔である^[18])が二人を追いかけてくる。タマミは二人に向かって蛇を次から次へと投げつける。一匹の蛇が人形の首に巻き付くとその首元に噛みつき、人形は死に絶えてしまう。そこで小百合は目を覚ます。このシークエンスは漫画ではすべて削除され、わずかに1コマで語られている(眠る小百合の上部の地の画面に彼女の内面の声を書き込まれた形で処理されている。「その夜わたしはこわい夢を見ました蛇になったお姉さん

がにげるわたしとお人形をおっかける夢です」^[19]。

二回目の夢の場面は、屋根裏部屋でタマミの秘密を覗き見たあとで登場する。夢の中で小百合はベッドで眠っている。目を覚ますと蛇娘が傍にいて、小百合に向かって蛇を投げつける。次々と投げつけられる蛇が剣に変身して小百合の方に飛んでくる。身をかかわす小百合。そのうち蛇が巨大化して小百合を襲う。小百合は剣を手にとって巨大蛇に挑み、その首元に剣を突き刺す。蛇は死に絶える。小百合はそれに近づくと、首に剣が刺さって死んでいたのは蛇ではなくタマミであった。ここで小百合は夢から覚める。このシークエンスも漫画ではすべてカットされ、説明のコマすらもない。

こうして映画と漫画を比較してみると冒頭部分の恐怖を高める演出と小百合の夢のシークエンスの特撮シーンが漫画化に際して斥けられていることが分かる。棋図が映画におけるこうした演出を漫画において描かなかったということは、それが漫画にとって必ずしも必要でないことを意味している。事実、棋図の漫画はそれらの場面がなくとも十分成立しているし、むしろ無駄なくストーリーが展開されているような印象を受ける。

映画『蛇娘と白髪魔』は今から50年以上も前に製作された作品のためタマミの顔の表皮の痣や夢の場面の特殊撮影、そして白髪魔の造型など、どうしても当時の技術的限界を感じさせてしまう。もし現代のCGなどを駆使したSFXで撮影したら原作の雰囲気により一層近づくことができただろうか。そしてそれをまた漫画にしたとしたらどういふ変化が生じたのだろうか。このあたりのことは想像の域を出ないが、少なくとも『蛇娘と白髪魔』から20年後に大林宜彦が撮った『漂流教室』を観れば棋図漫画の映画化の困難さは瞭然としているように見える。

註

- [1] 四方田犬彦『日本の漫画への感謝』（潮出版社、2013年）、117頁。
- [2] 前掲書、117頁。
- [3] 『蛇娘と白髪魔』は1968年12月14日公開の大映製作の映画。原作棋図かずお、監督湯浅憲明、脚本長谷川公之。ちなみに、若い頃の平泉征が「めぐみ園」の職員林達也役で出演している。
- [4] 映画『蛇娘と白髪魔』は大映が企画した「現代の恐怖怪奇映画路線」の1本で、次回作には同じ棋図の「猫目小僧」が予定されていたというが、残念ながら実現は見なかったようだ（『KAWADE 夢ムック 総特集棋図かずお』[河出書房新社、2004年]、204頁）。漫画版は映画のシナリオをもとに描かれたが、映画版のもとになった棋図漫画については、「蛇」ものと「赤んぼう少女」をミックスしたものであるという指摘があるが（前掲書204頁；高橋明彦『棋図かずお論』[青弓社、2015年]、452頁）、「紅ゴモ」に言及しているものは寡聞にして知らない。
- [5] 漫画版は映画版に先立って、『ティーンルック』第27号(11月12日)―第29号(11月26日)の3回に亘って連載された。映画公開が12月14日ということはすでに1か月

前には漫画版が出版されていたということになる。とすれば、少なくとも試写版などで公開前に楳図が映像を見た可能性はあるが、そうだとするとそれが漫画版にどの程度反映されているのかどうかは推測の域を出ない。

- [6] 「赤んぼう少女」には初出誌を含み9種の異本がある。これについて詳細に論じているのは、高橋の『楳図かずお論』(166頁)である。高橋の書籍は、楳図に関する本邦で唯一のまとまった本格的モノグラフィーで、極めて示唆に富む。わたしが参照した「赤んぼう少女」は、角川ホラー文庫版(1994年)である。
- [7] 映画『蛇娘と白髪魔』のもとになった「蛇」シリーズは、おそらく「口が耳までさける時」(1961年)、「ヘビおばさん」(1964-65年)、「ママがこわい」(1965年)、「まだらの少女」(1965年)、「ヘビ少女」(1966年)、「うろこの顔」(1968年)だと思われる(『楳図かずお論』、455-478頁)。わたしが参照した版は、『ヘビ少女：楳図かずお恐怖劇場』(角川恐怖文庫、2000年)、『楳図かずお恐怖文庫5』(朝日ソノラマ、1996年)、『楳図かずお恐怖文庫6』(朝日ソノラマ、1996年)である。
- [8] 「紅グモ」については次の版を参照した。『楳図かずお恐怖文庫10』(朝日ソノラマ、1996年)
- [9] 様々な表象メディア間(文学・映画・演劇・漫画・アニメなど)のアダプテーションに関する本は多くあるが、理論的考察も含めて有益なのは、リンダ・ハッチオン(片渕悦久他訳)『アダプテーションの理論』(晃洋書房、2012年)。また、漫画と映画を単純な比較研究の視点からでなく、そもそも漫画が「映画的手法」という観点から批評されるようになったその歴史と背景を根源から問い直す議論を展開して刺激的なのは、三輪健太郎の『マンガと映画：コマと時間の理論』(NTT出版、2014年)。
- [10] これら3つの場面は、「ママがこわい」に見られる。260-261、275-278頁。
- [11] たとえば、「紅グモ」の76、100頁など。
- [12] 「紅グモ」の132-134頁。「赤んぼう少女」の122-126頁。
- [13] 「赤んぼう少女」、77-88頁。
- [14] 「赤んぼう少女」、35、131頁。
- [15] たとえば、「みにくい人」(1969年)や「姉妹」(1969年)など。
- [16] 「赤んぼう少女」、151-152頁。
- [17] 「蛇娘と白髪魔」、173-174頁。
- [18] 「蛇娘と白髪魔」、182-184頁。
- [19] 「蛇娘と白髪魔」、188頁。